様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２００７７
研究課題名（和文）　１９世紀フランス美術史における「共同制作」の位相

研究課題名（英文）　Aspects of collaboration of artists in the Nineteenth-Century France

研究代表者
阿部　成樹　(ABE SHIGEKI)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：９０２７０８００

研究成果の概要：１９世紀フランスにおける芸術家たちの共同制作について、総合的な見地から検討を行い、その性格の変遷を歴史的に見るとともに、理論的な視座から意味づけと分析を試みた。その結果、共同制作の意味合いは、流派内での図像の共有、やり取りといった情報交換の色彩が強いものから、様式上の共同研究へと移り変わったことが見て取られた。またタルドによる模倣に基づく社会理論により、そうした相互参照としての共同制作のあり方を、近代社会の組成そのものと実質的に関係づけて論じる可能性が新たに見いだされた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	300,000	2,200,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術史、近代、フランス

１．研究開始当初の背景

(1)代表者は博士論文（パリ大学）において、ダヴィッドの流派におけるアングルの自己形成の問題を、同じ流派内の芸術家間の交流との関連において実証的に考察した。

これは、芸術家の自己形成の問題を、過去の諸作品の孤独な研究に還元する傾向の強い従来の美術史言説に対して、芸術家と彼を取り囲む人的環境との生きた関係性がもたらすものを積極的に評価しようとする試みであった。

(2)またその後の研究において、近代芸術家の制作をめぐるアトリエという環境の意味について、さらに研究を深め、論文を発表して来た。

その中で、近代フランスのアトリエが芸術家相互の接触の場であり、その接触の内実は相互批評と相互模倣ではないかと考えるにいたった。つまり、親方を頂点とする前近代の工房におけるピラミッド的な関係性から、師を第一人者としつつも、画学生相互の関わりが師弟関係に劣らない重要性を持つ、どちらかというと水平性の強い関係性への推移ではないかと考えた。

さらに、ロマン主義的な芸術家の孤独がアトリエ図として表象されることがあり、その

表象は一面、近代社会に向けた人間関係（ソシアビリテ）の再編成の中で、とりわけ職人階級が被った変動と深く関連づけられるのではないかと考えた。
(3)そうした中で、近代西洋美術史において一貫した視点でとらえられてこなかった、共同制作の問題について目を開かれ、今回の研究を着想した。すなわち共同制作とは、こうした芸術家相互の関連性が最も鋭角的に現れる行為であり、しかもその結果が造形作品として残されるという、芸術家間の関係性を美術史的に解明する際にもっとも好適な特質を有するからである。

２．研究の目的
(1)今回の研究の目的は、これまで個々の芸術家の伝記のなかで個別に論じられてきた共同制作の問題を、近代特有の文脈のなかで、一貫した視点でとらえることである。その文脈とは、前近代までの工房とは異なる意味合いを持つアトリエ、および流派あるいは芸術家集団という歴史的環境である。また、広くは社会の中で孤立を深め、独創性の発揮を求められるという歴史的社会的背景も視野に入れることを目指した。
　共同制作は、伝記における逸話のひとつとして扱われることがほとんどで、その際当然ながら、協同した芸術家のどちらか一方の伝記を扱う視点で取り上げられることになる。その結果、共同制作の共同性そのものが主題的・積極的に評価分析されてこなかったきらいがある。
(2)また、逸話として扱われてきたために、共同制作を通じて芸術家間の関係性の特殊性が強調されることになった。しかし、これまでの研究により、芸術家間の関係性は、近代社会一般の中で成立しつつあった新たな関係性（ソシアビリテ）の一部として検討すべきである。そうでなければ、極端に言えば、近代美術史は「天才神話」に基づく１９世紀以来の美術史言説から根本的には離脱できないことになるだろう。そこで、共同制作に見られる関係性を、近代社会一般の関係性と結びつけて論じる理論的視座を獲得しなければならない。それもまた本研究の目的である。

３．研究の方法
(1)まず個別の事例について、主に一次資料の収集と分析をはかった。特にセザンヌとピサロの例を重視して、一次資料の収集を図った。このふたりについては、事例としての重要性のみならず、近年資料の紹介と研究が長足の進歩を遂げているからである。
　その他、ダヴィッド派内の芸術家たちによる共同制作事例に関わる資料の再検討の他、バルビゾン派からポン＝タヴェン派にいたる流派、芸術家集団に関わる事例を念頭においた。

(2)同時に、これら近代芸術家の共同制作を一貫した視点から分析するための、理論的視座の獲得を目指すこととした。それなくしては、結局のところ個々のエピソードの集積になってしまうからである。そうした視座は、これまでの研究成果にのっとり、１９世紀フランス社会史、特に「ソシアビリテ」の社会史研究と、社会学における人的関係の理論に学ぶこととした。
　前者の、社会史におけるソシアビリテ研究については、モーリス・アギュロンによる先駆的な研究から、それに刺激を受けて豊な成果をあげつつある、日本におけるフランス社会史研究からも大きな恩恵を被った。
　後者の理論的研究についてはいっそう手探りを強いられたが、研究の途次で１９世紀末から２０世紀初頭に活動した、フランスの社会学者ガブリエル・タルドの重要性に注目し、消化分析を試みることとなった。

４．研究成果
(1)事例研究においては、大略次のような知見を得た。
　１９世紀はじめのダヴィッド派内における共同制作（本研究では、１点の作品を複数で制作する場合の他に、同じモチーフあるいは同じ主題を同時期に、相互に参照しあいつつそれぞれ制作する場合も含めて考える）では、特定の図像的要素のやり取りといった性格が強い。こうした共同制作の成果は完成作に現れることもあるが（例えばアングルとベルジュレによる〈ラファエロ伝〉作品の例など）、同時に習作（デッサン、スケッチ）段階でしか確認できないものもある。これに、厳密には共同制作とは言えないが、画学生たちが相互にモデルを務めて描く肖像画制作のケースを加えて考えれば、こうした共同性が画家としての修練の根幹部分に位置づけられており、彼らの個性の基盤部分を共同で形成するというシステムが確立されていたことが分かる。これは、独創性と天分がすでに強調され始めており、その後本格的に開花するという美術史特有の状況、及び近代社会のあけぼのという時代状況との関わりで考える時、たいへん興味深い。
　だが一方で、ローマ風景をスケッチしながら歩くアングルとグラネのように、後のバルビゾン派や、はるかにくだって印象派の野外スケッチを思わせる実践をもかいま見ることが出来る。むろんこの種の実践は、すでにプッサンとクロードや、１８世紀のロベール

とフラゴナールにも類似の場合を見ることができる。しかし、これらの例と比べてアングルとグラネの場合は、彼らが描くモチーフ以上に描く様式（スタイル）をも共有しているように見える点で、興味深い。そしてこの点が、彼ら以降の共同制作の主調音となって行くように思われる。

ダヴィッド派に多く見られた共同制作のあり方は、前近代の工房システムにおける師弟間の共同制作の残滓とも取れるが、更なる検討が必要である。これに対して世紀中葉、バルビゾン派の例から以後は、むしろ様式上の相互参照の意味合いが強くなる。この特徴は世紀末葉に至って共同研究の色彩を強めるが、同時に流派（集団）的性格を失って、独立した芸術家による一対一の関係に変貌して行き、模倣を通じた独創性の探究という矛盾した契機をはらむようになる。その典型例がセザンヌとピサロの場合ではないかと考える。

彼らの共同制作や関係性一般は、すでにオルセー美術館等を巡回した展覧会（２００６年）のテーマとなっており、その展覧会カタログにおいて詳しい検討が行われている。彼らの関係性はかなり密であることが分かるが、そこから生まれた諸作品は意外にモチーフを共有していない。感じ取れるのは、むしろ様式上の相互参照であるが、それもまったくの相互模倣とは見えないところが興味深い。言ってみれば彼らの相互参照とは、いわば互いの作品の相互解釈であるように思われる。解釈とは自己の外に対象を持ちながら、同時に自己の独創性を探究し発揮できる行為であるが、１８８５年にいたる時期のピサロとセザンヌの関係性とは、一方が他方に影響を与えたというようなものではなく、むしろ相互に相手の独創性を高めあうようなものではなかったかと思われる。従来の美術史で重宝されてきた「影響」の概念を用いていては、こうした関係性の豊さをとらえることはできないと思うようになった。

(2)本研究の理論面では、とりわけタルド(1843-1904)による模倣の理論の重要性を発見した。タルドは社会を形作る集団性の根拠を、その成員の相互模倣と、それによる一種の同化現象ととらえて独創的な社会観を提出している。この模倣は、普通伝播といわれている文化現象をも含む意味の広いものであり、また模倣を通じて「発明」が生みだされる過程も説得的に論じられている。

この広義の模倣（特に相互模倣）の理論は、従来の「影響」の概念に代わって、独創性を標榜する近代芸術家にとっての共同制作の意味を照らし出し、しかもその問題を近代社会の中に置き直すことを可能にするように思われる。なぜならこの場合、共同制作に見られる近代芸術家の関係性がそのまま、近代社会の実質である相互模倣の一様相でもあるからであり、社会を常に「背景」ととらえてきた従来の近代美術史を乗り越える可能性を秘めていると考えられるからである。

文化は模倣を通じて共有されてはじめて成り立ち、その伝播と相互交流の過程で必然的に多様化を遂げて行く。そうした過程をミクロにとらえたのがタルド社会学であり、マクロかつ歴史的にとらえたのが、同じ時期の民族学（人類学）ではなかっただろうか。そして後者の思考法はおそらくこの時代の美術史（特にアンリ・フォション）に多くをもたらしたが、こうした関係性の思考はまた、１９世紀から２０世紀初頭の美術のあり方そのものについても多くの示唆を与えうるのではないか。そのような図式が、今回の研究を通じて浮かび上がってきたと考えている。

(3)今後の課題として、個別の事例についてさらに多くの資料が残されているため、それらを集めて分析を行うとともに、他国の例（英国のラファエル前派、ドイツのナザレ派など）との比較を行い、歴史研究としての深化拡充を期したい。

さらに、理論面においても分析と整理を行い、それを通じて新たな美術史上の分析概念の獲得を目指したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①阿部成樹「追悼の政治　――ジャック＝ルイ・ダヴィッド《マラーの死》について」『表象』表象文化論学会編、第２号、１９０−２０８頁、２００８年、査読あり

②阿部成樹「手仕事と個　――オクタヴ・タッセールのアトリエ図」『西洋美術研究』第１３号、三元社、７３−９２頁、２００７年、査読あり

③阿部成樹「響きあうかたち　――アンリ・フォションと同時代の知的潮流」『美術史』美術史学会編、第１６２冊（第５６巻第２号）、３９７−４１０頁、２００７年、査読あり

〔学会発表〕（計　１件）

①阿部成樹「フォションとクローバー　――「超有機体論」をめぐって―」日仏美術学会ワークショップ「1920-30 年代の美術史家と美術批評家--フランス美術史編纂の歴史研

究試論」2008年12月20日、於日仏会館

〔図書〕（計　１件）
石鍋真澄他編著、阿部成樹分担執筆 小学館、『ルネサンス美術館』、２００８年、４５０−４５１頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
阿部　成樹　（ABE SHIGEKI）
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：９０２７０８００

(2)研究分担者

(3)連携研究者